

[個別論文]

## 中高一貫校における対人関係に関する研究<sup>1)</sup>

—内部進学者と外部入学者との交流過程—

大 嶽 さと子\*・石 田 靖 彦\*\*・山 田 孝\*\*\*  
石 川 久 美\*\*\*・吉 田 俊 和\*

**【問題と目的】**

**【方法】**

質問紙調査

目的

手続き

面接調査

目的

手続き

**【結果と考察】**

内部生から見た外部生

外部生から見た内部生

**【本研究のまとめ】**

### 【問題と目的】

文部科学省では、平成9年6月の中央教育審議会答申「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について（第2次答申）」の提言を踏まえ、平成11年4月に中高一貫教育を制度化した。中高一貫教育では、生徒や保護者のニーズなどに適切に対応できるよう、1つの学校として一体的に中等教育を行う「中等教育学校」、同一の設置者による中学校と高等学校を接続する「併設型」、教育課程の編成や教員生徒間交流の連携を深める「連携型」という、3つの実施形態がある。本研究の調査校である名古屋大学附属高等学校は、このうちの併設型中高一貫校である。このような中高一貫校

1) 本研究は、『附属学校における交友関係の研究』の一部として行われたものである。調査の実施に当たり、佐藤俊樹・長瀬加代子・三小田博昭・杉本雅子・渡辺武志の各先生には、大変お世話になりました。記して、感謝の意を表します。

\* 大学院教育発達科学研究科

\*\* 愛知教育大学教育学部

\*\*\* 教育学部附属中・高等学校

においては、高校入学時に、併設された中学から高校へそのまま進学してきた生徒（以下、内部生とする）と、他中学出身を卒業し、高校から入学してきた生徒（以下、外部生とする）とが、学級内に共存することになる。そのため、高校に入学した時点で、内部生は既存の対人ネットワークを有しているが、一方で、外部生はほとんどの生徒が既存の対人ネットワークを持たず、内部生の対人ネットワークの中に新たに参入することになる。また、内部生は、外部生という異質な他者を何らかの形で受容していくことになる。このため、一般の高校へ入学する場合と比べて、中高一貫校に適応していく過程には、外部生にとってより困難が伴うと考えられる。

中高一貫校における内部生・外部生の交流過程は、社会的アイデンティティ理論（social identity theory）によっても予測できる。社会的アイデンティティは、「ある個人が感情的で価値的な意味づけを持ち合わせているような、『ある社会集団に所属している』という知識（Turner,Hogg,Oaks,Reicher&Wetherell,1987）」と定義される。そしてアイデンティティ、とくに社会的アイデンティティと集団所属感とは、個人の自己概念が、所属している社会集団の特性によって記述されるという点において、密接に結びついているとされている。そのようにして、個人は自己概念を維持し、さらに高揚しようと努めるために、同様に集団やカテゴリーの自尊感情も達成し、さらに維持しようと努める、と考えられる。そしてその際に、肯定的な社会的アイデンティティに関しては、自集団に有利に認知できるように内集団（自己の所属集団）・外集団（非所属集団）間の比較を行うように努める、とされる（Hogg&Abrams,1988）。

このような枠組みを内部生・外部生の交流過程の解釈に適用するのならば、中学3年間をともに過ごし、集団としての何らかのアイデンティティが形成されていると思われる内部生は、異質な他者ともいえる外部生を内部生と比較し、排除と受容を繰り返しながら、徐々に外部生を受け入れていく、という過程をたどると推測される。

一方で外部生の間には、内部生にみられるような、外部生としての培われたアイデンティティというものは、それほど存在していないと思われる。外部生間の関係というものは、その多くが入学とともに対人関係を形成したに過ぎないからである。そのため、入学当初の外部生は、いわば「集団転校生」ともいえるような立場におかれていると思われる。

対人関係の形成過程により困難が伴うと予測される外部生の対人関係の形成過程を検討することは、高校側の受け入れ態勢の把握のためにも、また、今後の中高一貫教育の円滑な推進のためにも、意義があると思われる。堀田（2001）では、高校生は、友人への信頼や安心感により精神的健康が高まることが指摘されており、対人関係の充実感が、適応感に影響を及ぼすことが予測される。この点については、植村（2003）においても、女子に関しては学校適応感と対人関係とが関連することが述べられている。

そこで本研究では、中高一貫校における内部生・外部生の適応過程について調査を行い、どのような側面が適応感と関連しているのかを事例的に検討することを目的とする。具体的には外部生が内部生を、また、内部生が外部生をどのように認知し、交流を図っているのかについての面接調査をおこない、その認知傾向と友人との適応感とがどのように関連しているのかをまとめる。

## 【方法】

### 質問紙調査

**目的** 面接調査を実施するにあたり、友人との適応感を2期にわたって測定することにより、適応感の変化の様相（パターン）を明らかにする。

### 手続き

#### 1) 調査時期と調査対象

2004年5月および7月、名古屋大学附属高等学校1年生120名（男子50名、女子70名）を調査対象とした。このうち40名（男子11名、女子29名）が外部生、80名（男子39名、女子41名）が内部生である。なお、質問紙に関して、実際の有効回答者数は、5月が116名、7月は115名であった。調査は各学級担任によって実施された。

#### 2) 質問項目

友人との適応感を測定するための質問を3項目作成した。具体的には「クラスの友だちといっしょにいると楽しい」「クラスには仲のよい友だちがいる」「クラスの友だちとは何でも話することができる」である。「5.よくあてはまる」から「1.まったくあてはまらない」の5件法で測定した。調査実施後、5月および7月の平均得点を算出したところ、それぞれ11.71（ $SD=2.15$ ）、11.79（ $SD=2.32$ ）であり、時期による平均点の差はみられなかった。以後、それぞれの時期の平均得点よりも「高い」あるいは「低い」といった観点から解釈を進めていくことにする。

### 面接調査

**目的** 外部生が内部生を、また、内部生が外部生とどのように交流を図っているのかを、友人との適応感との関連を踏まえながら検討を行った。

### 手続き

#### 1) 面接時期と調査対象

予備調査に参加してもらった生徒のうち、20名（男子7名、女子13名）に対して面接調査を実施した。実施時期は2004年6～7月であった。面接対象者のうち、8名（男子1名、女子7名）が外部生である。また、面接調査へは、担任教師により、調査の趣旨をあらかじめ入念に説明してもらい、そのうえで協力を快諾してくれた生徒のみに実施した。

また、調査は半構造化面接によるものであり、授業後に実施された。本研究の解釈に用いた質問の他に、友人との適応感に絡んだ他の質問もいくつか行っているため、面接に要する時間は生徒ひとりにつきおよそ30分であった。また、面接の様子は、より厳密な解釈をすすめるため、面接対象者の許可を得て録音された。

#### 2) 質問内容

##### ①外部生に対する質問

「高校から附属高校に来たわけだけれど、附属中学出身の人にはどんな印象を持っていますか？話をしたりしますか？真面目そうだとか、話してみるとけっこう気が合ったとか、何でもいいので思っていることを教えてください」

## ②内部生に対する質問

「高校から他の中学出身の人たちが入ってきましたが、どんな印象を持っていますか？話をしたりしますか？真面目そうだとか、話してみるとけっこう気が合ったとか、何でもいいので思っていることを教えてください」

以上のような質問を行った。また、面接の中で、内部生・外部生がお互いについてどのように捉えているのかが如実にわかるように、適宜質問を行った。

## 【結果と考察】

### 内部生から見た外部生

#### 1) 友人との適応感の様相

面接調査を実施した内部生12名（男子6名 女子6名）のうち、友人との適応感が上昇した者が4名、下降したものが3名、高い状態で維持された者が2名、低い状態で維持された者が3名であった。

#### 2) 結果の解釈

##### ①適応感が上昇した者

「もともと、別に入ってきて、仲間が増えるだけで」と、当初から受け入れ態勢はあったものの、「入ってきた頃はやっぱり緊張してたみたいで」と、緊張感があったためにすんなりとはいかなかった様子が見られた。また、「初めは、やっぱり嫌だった」と、既存のネットワークに踏み込まれる嫌悪感も少なからず持っていたようだ。しかし、「話が合う人は合う」というように、外部生の中に親しくできる友人を見つけることで交流を深めているように思われた。

##### ②適応感が下降した者

「違う次元って感じがしてる」「外部は外部で固まっちゃうから、もうその辺で別口」「話しかけてくる子は、素直にこっちも普通に返せたりするけど」「やっぱり知ってる人は知ってる人で固まる」と、入学当初は自分から積極的に受け入れる態勢はなかったものと思われる。また、「うちの部は先輩に対する敬語って厳しいんですけど、わかってない」と、学校独自の「しきたり」を理解していないことへの反感も感じているようであった。

##### ③適応感が高い状態で維持された者

内部生・外部生という枠組みを面接時にはあまり感じていない様子であった。「(内部生・外部生という枠組みへのこだわりが) ないですね」「意外とみんな『いけるクチ』ですよ(笑)」などと、外部生を受け入れている姿勢が感じられた。一方で、「まだ本質は見えてこない」「まあ個人の人間性の問題ですよ」「最初のうちは『外部は外部だけでクラス作ってほしいよねー』とか、みんな言っていましたね」などと、入学当初から警戒心なしで受け入れたわけではなく、外部生個人の人間性を見極めた上での受け入れであったように思われた。

##### ④適応感が低い状態で維持された者

「(外部生は) 友だち作ろうとするからしゃべりかけてくるんですよ」と、外部生がネットワークを広げようとしていることに煩わしさを感じているように思われた。「内部生としてのネットワー

クだけで事足りるから」だという。また、「公立からきた人は、普通の並」「久しぶり見慣れない個性の人が入ってきた」といったように、外部生の人間性を見極めた上で、結果として特に親しくしていない、という結論を導いた可能性が感じられた。

質問に対する内部生の回答結果はTable 1に示した。おおよそ回答の内容は大きく分けて3つに分けられるようである。まず一つは「ポジティブ印象」である。入学当初は緊張していたようだが、話してみると明るい子もいて、個性もあり、面白い、といったものである。ただ、積極的に働きかけた外部生とは話をする、といった回答がみられ、男子に関しては積極的に働きかけなかった外部生が孤立している様子であった。また、そういった状況について「今話していないから、これからはもっと話した方がいいのかな」と、懸念する回答もあった。女子は、入学前に「友達増えるかも」と、ネットワークの広がり期待していた傾向もあった。ただし、内部生が自分からネットワークを広げようとして働きかけたというよりは、積極的に働きかけてきた外部生と仲良くなった、といったような、ポジティブではありながらも、やや受身的な関わり方が見受けられた。いずれにしても、受け入れる態勢のある者はおおむね適応感良好な状態にあったと思われる。

一方で、外部生を侵害者として捉える「ネガティブ印象」もみられた。「最初の頃は全然わかんないから警戒みたいな感じはありましたね」、「今までの外部生の先輩が暗いから」と、入学前はネガティブな印象を持っていた、という回答がいくつか見られた。入学してからはこういった印象がポジティブに転じたものもある一方で、「まだ本質が見えてこない」「違う次元って感じ」などと、入学後3ヶ月たったものの、いまだ受け入れられずにいる者もあった。また、特に女子に関しては、「(内部生同士の)今の関係が崩れそう」「内部の話題が通じないから面倒」「外部は外部でクラスを作ってほしかった」など、既存のネットワークに足を踏み入れてくる侵害者として捉える回答が見られたことが特徴的であった。三好(1998)においても、女子の友人関係の特徴として閉鎖的で排他的な側面をもっていることが挙げられており、そういった傾向を裏付けるものであるといえよう。また、ネガティブな側面を持ちつつも、入学後、結果的に親しい外部生を見つけることができれば、適応感上昇し、そうでなければ上昇はしないようである。

以上の2つはいずれも、ポジティブであれネガティブであれ、自分自身との関係性の中での回答であったが、もう1種類みられた回答としては、「関係ない」といったものであった。この「関係ない」といった印象にはさらに2種類ある。1つは、「内部生・外部生という枠組みにはこだわらない」という、受け入れを意味するものと、「内部の友だちだけで十分」「自分には関係ない」という、拒絶を意味するものである。前者は枠組みにこだわらず、環境に順応していけるかどうかは個人の人間性の問題として捉えており、後者は、外部は外部で適当に楽しくやっていたらいい、といった無関心からくるものである。このような無関心は、既存のネットワークのみで十分であり、新しい関係を築くのは面倒だと捉える「ネガティブ印象」と根本的には通じる部分があるのかもしれない。外部生を拒絶している者は、比較的適応感が低い状態で維持されていることから、内部生同士ともあまり良好な状態ではない可能性もあり、そもそも学校全体への適応感が低いとも考えられる。

Table 1 内部生から見た外部生 [ ]内の数字：適応感得点の推移 〈 〉：面接者の発話  
 ( )：内容を解釈する上で手がかりとなる動作や状況説明 をそれぞれ表す。

(男子)  
 内B-1 [14→15]  
 それなりに話せなくはないし、お互いのメールとか知ってるし、でも教えあっただけでしていないですけどね〈お互いに全然って感じではないのね?〉ない。  
 〈印象は?〉できるから困るっちゃうんだよね〈あー勉強ができるのね?〉。うん。

外部から入ってきた人で、仲良くなったのは隣のクラスの人なんで、だから、別に、怖いとか、そういうような印象はもってないけど・・・(後略)

内B-2 [7→8]  
 入ってきた頃は緊張してたみたいで。みんな口数が少なくて、真面目だなんて感じだったんですけど。でも一ヶ月ぐらいたつと、みんなけっこうワイワイやって、今となっては、ほとんど内部生外部生なんて言葉はもう言わないぐらい。もともと、別に入ってきて、仲間が増えるだけで。(後略)

内B-3 [13→11]  
 外部の子は、話しかけてくる子は、素直に、わりとすぐ仲良くなれたけど、向こうが積極的じゃないと、こっちからもあんまり話しに行ったりしないから、その後もたぶんあんまり(話を)しないかなっていう。近づいていかない・・・。最初の頃は、やっぱり全然わかんないから警戒みたいな感じはありましたね。でも今は全然話せますね。高校入る前は、今までの先輩とか見てて、ちょっと暗めの人多いかなって感じがしたから、そういうイメージがあったから、明るい人ほしいな、みたいなの。

でも、これから3年間あるじゃないですか。で、先生にも「みんながみんな上に乗っていきけるわけじゃない」って言われたから、途中でやめてく人もいないじゃないですか。いろいろ原因はあると思うんですけど、たとえばその一つで、周りとうまくいかなかったっていう子が、たぶんやっぱり出てくると思うんですよ。今現在、話してない子とか、そういう子がそうなるっちゃうかなと思うから、今話してないから、これからはもっと話すようにしよとか、そうした方がいいのかなと。

内B-4 [12→12]  
 うちの生徒ってなんとなく違う感じがするって僕は感じてるんですけど、言葉じゃ説明できないんですけど。(中略) だから、その差はあるのかなって思ったんですけど。まあ、順応できる子は順応できるし、みたいなの。まあ、けっこう普通になじめるし。そこは、入ってきた子(外部生)が、そもそもうちの学校の雰囲気合ってたのか、それとも実は、そんなに他と違

いがないのかわかんないんですけど。何か壁のできる学年と、できない学年がいるらしいんですけど、男は、けっこうなじむとこはなじむし。女子は、何かすごいいろいろ壁ができてたりしますけど。でも、やっぱり派閥意識が強いじゃないですか。まあ個人の人間性の問題なんですよ、結局。

内B-5 [15→15]  
 まだ本質が見えてこないっていうのがありますね、はい。特にまだあんまり付き合っていない人とは、そうですね。わかんない。内部生外部生ってのは、ないですね。クラスでも、ない。名大附自体がそういうの(内部・外部という枠組みに対するこだわり)ないので、やっぱりないですね。入ってきた人に特に面白い人が多い。みんな個々に個性がある。

内B-6 [12→9]  
 別に同い年だし、話せないことはないって言うか、話せば普通の会話はできるけど、笑いとかの対象が違うような感じがする。(中略)〈自分からは、あんまり話したりしないの?〉用があれば、(外部生の)みんながみんな、内部生と仲良くしようとするけど、結局外部は外部で最初固まっちゃうってところがあるから、もうその辺で別口。別にいても別に全然いいし、外部は外部で楽しそうだし、いいんじゃないって。好きな子同士でグループ作ってって言われれば、普段話してないってこともあるけど、なんら迷うことなく、そういう時は分かれる。違う次元って感じがしてる。

女の子は、はたから見てると多少あるけど、まあ、やってるっていうか。結局、外部でも、内部とどどん積極的に話しかける子は、輪に入っていくし、逆に、ちょっと怖いなあってところがあつたりする子は、外部中心のグループになっちゃう。一緒にいて楽しいって思えるところが違うんじゃないかな。

(女子)  
 内G-1 [9→11]  
 初めはやっぱり嫌だったし〈なんで?〉やっとなんかな仲良くなってきて、今のままでも楽しいのに、ここから40人も入ってくると、どうなるのって感じで。(中学)3年生の頃は(行事で)決める時とか、もめたりとかしたんですけど、まとまって楽しかったから。それに(外部生に)女子が多かったんで、「なんかまた、これから友だち関係どうなるんだろうね」って話は(入学した頃)よくしてた。実際来てみたら話が合う人は合うで、それはそれで楽しいけど。(中略)〈話したりしないの?〉うん、あんまり。っていうか、話す内容がないというか。(後略)

## 内G-2 [11→11]

やっぱり最初は内部の子は、そのまま持ち上がりだから、軽い気分ではしゃいでるけど、外部の子は、それに入れなからちょっと、おとなしい感じだったんですけど。だいたい慣れてきて、はしゃいだりしてますし・・・意外とみんな「いけるクチ（気が合う）」ですよね（笑）。でも、なんか最初は「外部は外部だけでクラス作ってほしいよね」とか、みんな言っていましたね。〈どうして？〉内部の子で3年間慣れちゃってるから一、他の子が入ってくると、今の関係が崩れちゃいそうとか。いろいろ。あと、外部の子とかいると、ちょっとめんどくさそうだとか。話をする時とか、内部ネタ、みたいなとかがあるじゃないですか。そういうのが通じなかったりとか。（後略）

## 内G-3 [10→10]

（前略）今は、うちのクラスは、外部とか内部とか言い方としてはしてるけど、もう、みんな同じ学校の人って感じで、内部だから外部だからっていうのは・・・校舎内で道に迷っている人を見る時ぐらい。「場所どこ？」とか、「どうやって行けばいいの？」とか聞かれると、そういうことを思うけど（後略）

## 内G-4 [11→11]

最初、みんな（外部生）友だち作ろうとして、しゃべりかけてくるんですよ。こっちは、もう内部に十分友だちがいるから、ひく（退く）っていうか、ムリしてるなあって。だから仲よくしようと思ってなかった。自己紹介もめんどくさいし（後略）。

## 内G-5 [12→8]

（前略）内部生とは違いますね。部にもよると思うんですけど、うちの部活は、先輩に対する敬語って厳しいんですけど、わかってない。（中略）部長にタメ口を使うんで、もうびっくり！ちょっと！って感じ。部長さんが、そういうの厳しくない人で、全然気にしてないみたいなんですけど、それは、同学年の中で、「なんとかしないとね、あれは」みたいな。まずいでしょ。それは。

〈クラスの中では？〉内部外部で固まりやすいですよ。やっぱり知ってる人は知ってる人で固まる。その方が話が通じるし、中学の時の話もできるし。気にしなくても。自然と。

## 内G-6 [11→11]

外部生と話してた時に、「附属の人はいろんな面で特技がある」って言われた。外部生も、特技とかはあるんだろうけど、特にそういうところで、目立ったところが無いっていうか、普通の人が多いっていうか、そんな感じなんですけど、内部生は飛びぬけた才能のある人が多い、とか。あ、そう大して違いはないんですけど、内部生のほうが、キラキラしてる感じがする。キラキラしてるって言うか、なんかそんな感じ。

入学する前は新しい友だちが来るんだなあって。友だちが増えるかも、みたいな感じで。で、中学卒業する時に、先生が「新しく来るメンバーとも仲良くやってけよ」、みたいな感じで言ってたんで、「ああ、なるほどなあ。じゃあ友だち作んなきゃ」って。実際今は関係なく仲良くやってるし。

## 外部生から見た内部生

### 1) 友人との適応感の様相

面接調査を実施した外部生8名（男子1名 女子7名）のうち、友人との適応感が上昇した者が3名、下降した者が3名、高い状態で維持された者が2名であった。

### 2) 結果の解釈

#### ①適応感が上昇した者

入学当初は、自分をどこまで出したらいいのかといった迷いや、本当の自分をうまくあらわすことができないといった悩みを抱えていたと思われる。「考えてるうちに仲良くなってきたから考えなくてもよくなった」というように、結果として内部生の中に親しい友人を見つけることでそういった悩みが解消され、適応感が上昇したと思われる。

#### ②適応感が下降した者

内部生が3年間積み上げてきたネットワークに入れなという疎外感や、内部生の外部生に対する態度への不快感など、内部生との対人関係に適応感を感じることができない様子がうかがわれた。こういった傾向の外部生は、内部生がすでに熟知しているような行事を経るごとに「内部生の流れについていけない自分」を認識し、疎外感を募らせているように思われた。

### ③適応感が高い状態で維持された者

友人との適応感が初めから高い状態で維持されているものの、中学からの輪に入り込めないという寂しさも経験しているようである。しかし、そういった内部生のまとまりのよさを、「(内部生は)3年間一緒だったわけだから」と前向きに捉え、学校全体のまとまりのよさとして感じることできているように思われた。

外部生に関する回答はTable 2に示した。外部生は、およそ2種類の回答が得られた。まず1つは、「ポジティブ印象」である。ただし、内部生にみられた、自分との関係性について言及するものとは異なり、「男女の仲がいい」「個性を尊重するところがいい」といった、内部生というよりはむしろ学校全体の風土に対する印象が多く語られた。こういった印象を語る者は、概して適応感が高い、あるいは上昇しているという傾向がみられた。中には、「自分の知らない内部の話題を教えてください」と言ったものもあり、内部生が面倒と感じていることが、一方では外部生には「興味深いこと」「楽しいこと」として捉えられており、内部生・外部生の間での関わり方の温度差が感じられた。

もう1つは、「ネガティブ印象」である。その多くが、「中学からの輪に入っていけない」「中学の時の話をされると寂しい」「事情に通じているので行事の時に置いていかれてしまう」「まとまっていて行っていけない」など、内部生のネットワークを目の当たりにし、その閉鎖的で排他的な側面を感じ取っているものである。これは、「授業中によくあてられるのは内部。先生が名前を知っているからだと思う」と、授業中の些細なやりとりからも、その閉鎖的な側面を感じるようであった。このように学校風土を「まとまりがよい」としてとらえるのではなく、閉鎖的だと感じている者は全般的に適応感が下降している傾向がみられた。また、ある外部生の女子は「外部生の女子が内部生の男子と親しくすると、内部生の女子がやきもちを妬き、悪口を言うのは子どもっぽい」と、述べており、こういった現象も、「内集団」である男子と、「侵害者」である外部生の女子とが親しくすることを良かれとしない、内部生女子の排他的な側面をうかがわせるものであった。

Table 2 外部生から見た内部生 [ ]内の数字：適応感得点の推移 < >：面接者の発話  
( )：内容を解釈する上で手がかりとなる動作や状況説明 をそれぞれ表す。

(男子)

外B-1 [13→14]

(前略) いつも1学期はそうなんですけど、最初から自分の言いたいことをパッパパッパ言っちゃうと、みんなから避けられて、あんまよくないのかな、と思ったりとか、でも自分をパッパパッパ出さないと、逆に演じてるって感じになっちゃうし、要は、最初から中身を出すべきなのか、あまり出さなすべきなのかっていうのがよくわからなくて、結局あんまり出さなかったんですよ。でも中身でしたら、「おまえ、すごい変わった奴だったんだな」って。(中略) でも、どうしたらいいのかは、今もわからない。

林間学校の前にクラスの中で話し合っていた時に、ある外部生が「おまえら静かにしろよー！」って一言、言ったんですよ。で、内部生の人「なんだ、あれ、

誰だよ」って。だから、最初の方避けられちゃったんですけど(後略)。

(女子)

外G-1 [15→13]

内部の子のグループに入っていけない。一人ずつならいいけど。個々に自分がくる前から仲よして感じだから。<そういうのって、どこでわかるの?>やっばり、話をしてて。あと、先生が、授業で、やっばり名前を覚えてない時って、内部の子ばかりあてちゃうじゃないですか。内部の子は知ってるし。あてやすいっていったらあてやすいだろうから。(中略) (内部生は) みんなそれぞれの性格わかってるし、この、たとえば「いつもこの行事はこんな感じでやってるから、こんな感じだろう」って、もうパッパッと決めてっ



ちやうから、「あれ、そうなんだ？」って感じで。置いてかれる感じ。

入学当初からあんまり話せてないけど、半年ぐらいしたらなじむだろう、という感じ。グループを越えてってというのは、あんまり（ない）かもしれないけど。なじみたくないあ、なじめるかもって。こっちばかりが、むこうを「怖いな」って思ってるだけじゃなくて、向こうも、「怖いな」って。っていうより、異物・・・変な言い方だけど（笑）。

#### 外G-2 [7→9]

なんか男子と女子で仲いいなって、男子と女子のわけ隔てなく、みんなで仲いいなって。それが第一印象。でもそれは今でも変わらない。でもいいことだと思う。だからそれは変わってない。中学の時はもう、きれいに分かれてて。男子、女子で。なんかクラスでやる時もまず男子で固まって、女子で固まって、先生が「はい寄ってー」って感じでやってたからー。うちのクラスだけだったかもしれないけど。先生が頑張ってた部分があって。ここは、男子とか女子とかいうんじゃないって、人間同士が仲がいいって感じ。

#### 外G-3 [11→14]

入学式の時に、壁にクラスの発表がしてあって、内部生が固まって「キャーキャー、ワァー」とか言っていて、「えー、もうグループできてるしー」って感じで。外部生は、まだお母さんとそこら辺で立ってしゃべったりして、孤立してたけど。お母さんが「行きなさいよ」って言っても、「えー、だってひとりだし」って感じで。

（中略）今は、もうそれほど内部生は内部生って感じではなく、みんな一緒な感じ。〈会話とかには出てくるの？〉はい。っていうか、話の中で、「わかんない」とか言うと、「中学の頃、〇〇さんはこうだったんだよ」みたいな感じで教えてくれたりする。

〈初めは気を使ったりした？〉私はしてないけど。能天気な方だから（笑）。そこまでは。大丈夫だろうって。でも、けっきょく外部で固まっちゃった子たちもいるから。なんていうか、アイウエオ順が近くて外部生同士で固まっちゃうと、なかなか難しいのかも（後略）。

#### 外G-4 [15→15]

やっぱり内部生は中学校の時の思い出があるから。私は、途中からっていうか、外部生だから、そういう時の話を聞いてると、なんとなくさびしいなあって。聞いているのは楽しいんですけど、でも、時々そう思っちゃう。

#### 外G-5 [15→15]

初めはすごくまとまってるから、（内部生の輪に）入っていけなかった。（中略）入学するのが楽しみで楽しみで仕方がなかったけど、入ったときには最初戸惑いましたね。でも、内部生が多くて、まとまって。今のグループは外部生ばかりで、まあたまたまなんだけど。（中略）クラスは、わりと安定してる。いじめとかもないし。個人的に喧嘩はあっても、グループ間ではないし。

#### 外G-6 [12→11]

（前略）勉強熱心。あと、男女の仲がいい。それは今でも同じ印象。それと先生に質問する人がいる。中学だと、そういうことすると、みんなに「だまれ」とか言われるんですよ。最初見た時、「ああ言われるじゃん」って思ったんですけど、誰も別に何も言わないし、認める。だから、勉強とか、意見を言ったりとか、そういう、人と違ったところがいいみたいな、個性っていうか。中学の時は、そういうのは絶対やられてた（いじめられていた）（後略）。

#### 外G-7 [15→14]

（前略）内部生の子は、外部生の子が内部生の男の子と仲良くするのが気に食わないみたいで、いろいろ言ってるから、子どもっぽいかなって。やきもちかな。ある女の子が一人いたんだけど、確かにやりすぎのところがあったんだけど、「ちょっとやりすぎじゃない」、みたいな感じで。他の子も、別にやりすぎてないでしょって子も、「ちょっと、なんか仲よくない？」みたいな。男子への態度みたいなことで。そういうことを、ごちゃごちゃいうことが子どもっぽい。（後略）

## 【本研究のまとめ】

本研究で被面接者が語った内容をFigure1.にまとめた。特徴的であったのは、内部生が外部生との、外部生が内部生との関係を比較する際に、内部生は内部生全体と外部生全体を比較するのに対し、外部生は自分の出身中学と内部生全体とを比較する、という点がうかがわれたことである。内部生が友人との適応感を感じられない場合でも、多少なりとも内部生の中に自分を理解してくれている友人が存在している可能性はあるだろう。しかし、外部生が友人との適応感を感じられない場

合には、外部生の中にも自分を理解してくれる友人が存在するとは限らず、学校そのものに自身のアイデンティティを築けない可能性が高くなると思われる。そのため、外部生が適応感を感じられない場合というのは、内部生のそれと比べて、より深刻な状況が想定される。また、外部生の友人との適応感を促進させるために、行事などを通じた内部生との交流を進めることは一つの対処ではあるが、かえって外部生が疎外感を強めてしまう可能性も考えられる。外部生がより適応していくためには、むしろ教師や保護者といった周囲の人間が、特にその適応状況に配慮をする必要がある。また、過去に外部生として入学するという経験をし、外部生ならではの悩みに共感できる、2年生や3年生の外部生が、入学時に外部生1年生の相談にのったり、入学後も状況に応じたフォローをしたりするなどの取り組みもその効果が期待できるとされる。

最後に、本研究の問題点を挙げておく。本研究は1校1学年から得られたデータであり、きわめて少人数を対象としたものであるため、考察された知見が一般的にあてはまるとは必ずしもいえない。今回得られたデータをより一般的なものにするために、多人数に対する、量的な側面から捉えた調査も必要であると思われる。また、本研究では、ポジティブな印象を持つことで高い適応感を得ることができるとは、それとも高い適応感を得ているからこそポジティブな印象をもっているのか、といった因果の方向性が明らかにされていない。そういった因果の方向性についても検討する余地があると思われる。

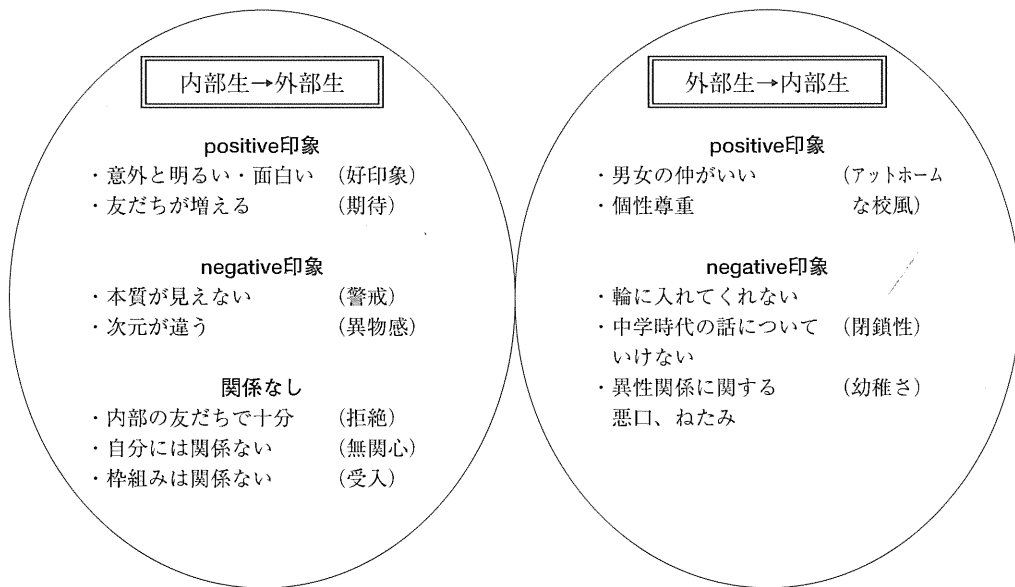


Figure1. 内部生・外部生それぞれのお互いに対する印象

【引用文献】

Hogg,M.A.,&Turner,J.C. 1988 *Social identifications : a social psychology of intergroup relations and group processes*. London : Routledge. (吉森護・野村泰代 (訳) 社会的アイデンティティ理論—新しい社会心理学体系化のための一般理論 北大路書房

- 堀田仁美・無藤隆 2001 青年期における見せかけの自己行動と友人関係の適応感、及び精神的健康との関連 お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, 3, 79-91.
- 三好智子 1998 女子友人グループについての理論的考察 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 353-361.
- 初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室2004 中高一貫教育の概要  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/ikkan/main5\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/ikkan/main5_a2.htm)
- Turner,J.C.,Hogg,M.A.,Oakes,P.J.,Reicher,S.D.,&Wetherell,M.S. 1987 Rediscovering the social group : a self-categorization theory. Oxford & New York : Basil Blackwell (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論— 誠信書房)
- 植村善太郎 2003 中高一貫校への外部入学者の対人関係と学校適応感—ある国立大学附属高校における事例的検討— カウンセリング研究, 36, 57-67.

(2005年1月受理)

# Interpersonal Relationship and School Adjustment in a University-Affiliated High School:

— Friendship Development between Advancing Students and Newcomers —

Satoko OHTAKE\*, Yasuhiko ISHIDA\*\*, Takashi YAMADA\*\*\*, Kumi ISHIKAWA\*\*\*  
and Toshikazu YOSHIDA\*\*\*\*

The aims of this study were: 1) to investigate the process of friendship development comparing students who advanced from the junior high school level to the high school level within the same school (advancing students), to those who were admitted from other schools at the high school level (newcomer students); 2) to examine how these two groups of students perceive each other; and 3) to examine the relationship between attitudes toward each other and their interpersonal adjustment. An interview survey was conducted, with the following results. First, advancing students were likely to distinguish between two broad categories, consisting of advancing students, and newcomer students, while newcomers viewed themselves not as a single entity, but more on an individual basis, while they viewed advancing students as a group. Second, advancing students who were more accepting of newcomers exhibited higher levels of interpersonal adjustment, and development of intimate relationships. On the contrary, advancing students who were less accepting of newcomers showed only low levels of interpersonal adjustment. Third, high interpersonal adjustment was seen among newcomers who viewed the school atmosphere positively, or who developed close relationships with advancing students. In contrast, low levels of interpersonal adjustment were seen among newcomers who perceived themselves as being excluded from the advancing student networks.

---

\* Professor, Aichi University of Education

\*\* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

\*\*\* Teacher, Nagoya University, Attached High School

\*\*\*\* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University